第103回　埋蔵文化財セミナー資料

京都・古代の最新情報

—奈良・平安時代の山城・丹波—

1．恭仁宮跡の調査　奈良　康正　P 1～6

2．藤原摂関家と宇治の成立　浜中　邦弘　P 7～12

3．池尻遺跡と丹波国府　石崎　善久　P 13～18

日時：平成18年2月25日（土）　午後1時30分～4時30分
於　：宇治市生涯学習センター第1ホール

主催　京　都　府　教　育　委　員　会

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

後援　宇　治　市　教　育　委　員　会

京埋セミナー資料No.0103-314

恭仁宮跡の調査

京都府教育庁指導部文化財保護課
技師　奈良　康正

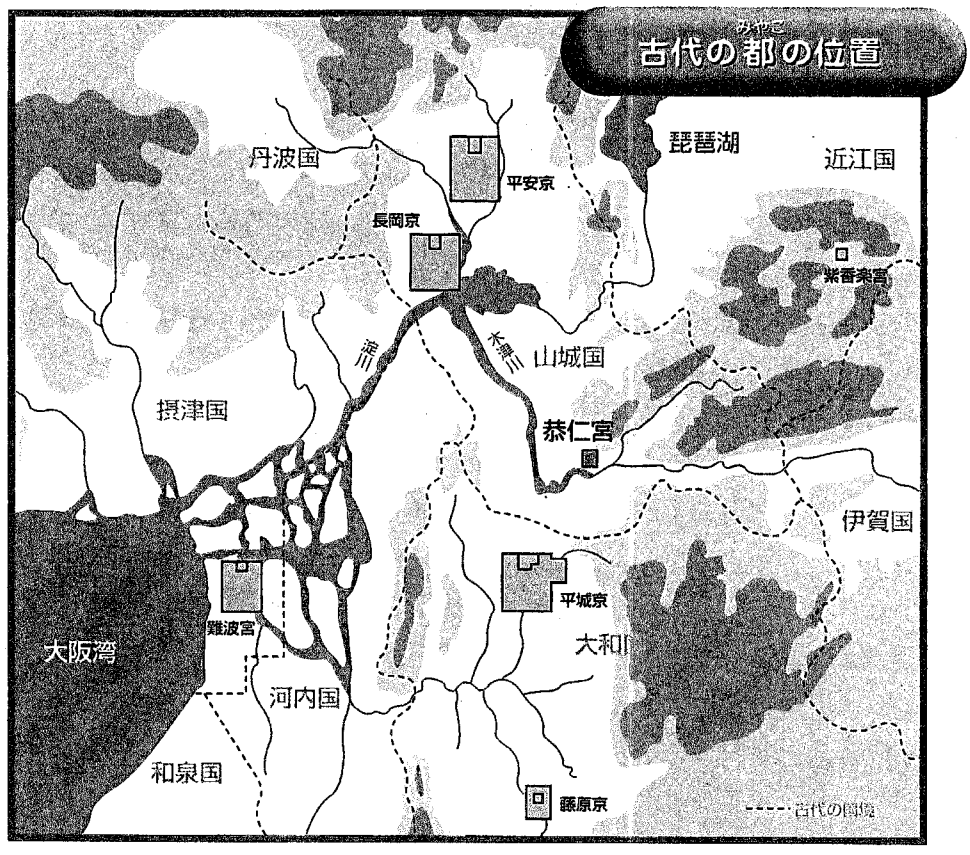
はじめに

京都府には、現在からおよそ1200年前に３つの都が造られました。

加茂町に天平の都・恭仁京（くにきょう）が造られ、向日市・長岡京市・大山崎町・京都市の３市１町には長岡京が広がっていました。そして、京都市には千年の都・平安京が造られました。

恭仁京は、今からおよそ1260年前の天平12（740）年に瓶原（みかのはら）に造られた奈良時代の都で、その中心となるのが「恭仁宮（くにきゅう）」です。

宮の中には、主に天皇が暮らし、さまざまな儀式などが行われた内裏（だいり）や、政治など国家の儀式が行われた大極殿（だいごくでん）や朝堂院（ちょうどういん）、さらには役人たちが仕事を行った役所（官衙（かんが））など、国のなかでも最も重要な施設が造られました。恭仁宮を中心とする加茂町・木津町の一帯は聖武（しょうむ）天皇の時代に一時期ですが、国の首都となっていたのです。そのわずか４年後の天平16（744）年には、都は大阪の難波宮へと移り、さらには再び奈良の平城京へと戻されました。恭仁宮は短い役目を終え、その後、天平18（746）年には、山城（山背（やましろ））国分寺へと造り替えられました。



第１図

これまでの調査で分かっていること

京都府教育委員会では、昭和48年度から恭仁宮跡の発掘調査を行っています。これまでに内裏や大極殿など、建物跡などがいくつか見つかり、宮の中がどのようになっていたのかも少しずつ分かってきています。

東西におよそ560m、南北におよそ750mの大きさで広がり、周りを大きな土塀（大垣）で囲んでいたことも分かりました。大極殿は宮内のほぼ中心に造られていて、高さ１ｍの大きな土壇の上に築かれた東西が約45m、南北が約20mもあった大きな建物でした。柱を大きな石材の上に建てる礎石建物で、北西と南西の隅に使われた礎石は、当時のままの位置にあることが調査によって分かりました。また、平城宮などでは大極殿の北側には内裏が造られていますが、恭仁宮では、この場所に東西に２つ並ぶ塀で囲まれた区画があることが分かりました。これは、その他の都では見られない恭仁宮だけのものです。今は、この２つの区画をそれぞれ「内裏西地区」・「内裏東地区」と呼んでいます。「内裏西地区」は周りが全て板塀（掘立柱塀）で囲まれ、東西が約98m、南北が約128mの大きさでした。「内裏東地区」は東・西・南の三方が土塀（築地塀）、北側が板塀（掘立柱塀）で囲まれ、東西が約109m、南北が約139mの大きさでした。朝堂院ではこれまでに建物跡は見つかっていませんが、周りを板塀（掘立柱塀）で囲んでいたことが分かり、南側に造られた門の跡（朝堂院南門・朝集殿院南門）も見つかっています。

今年度の調査で分かったこと

今年度は、大極殿の周りを囲んでいた施設（大極殿院回廊）を見つけることを目的に調査を行いました。

大極殿の北側と北西側で行った調査では、大極殿院回廊の解明につながる柱穴や溝跡などは見つかりませんでした。

大極殿の北東側での調査は、昨年の調査で見つかっている柱跡が東側にも続いていくかどうかを確かめるために調査を行いました。

昨年の調査では、柱跡が東西に4.5m間隔で３つ並んで見つかっていましたが、今年も同じように4.5m間隔でさらに８つ見つかり、合わせて11個も並んでいることが分かりました。東端の３つは他と違って間隔が3.6mと少し狭くなっていました。南北には５つ並んで見つかり、それぞれの柱の間隔は北から3.3m、2.7m、2.7m、3.0mとなっていました。柱掘形（柱を建てるために掘られた穴）は一辺がおよそ１ｍ前後の大きさで、ほぼ正方形に掘られていました。しかし、北端で見つかった柱穴は昨年と同じようにおよそ0.3m程の小さな正方形でした。

大型建物跡の正体は？

今回の発掘調査によって分かったことは次のとおりです。
①大極殿の北東に隣接する地点に大型の掘立柱建物が建てられていました。
②東西10間、南北４間の大型の建物跡（東西43.2m×南北11.7m）で、柱の間隔は東西が4.5m（ただし、東端２間分は3.6m）、南北は北から3.3m、2.7m、2.7m、3.0mとなっていました。
③柱掘形は１辺が１m程の大きなものでした。しかし、北側の１列だけは１辺が0.3mと小さくなっていました。

今回見つかった建物跡は全体の大きさはわかりましたが、調査ができなかった場所があり、全体の姿については分からないところが残されました。その性格についても分からないままで、この建物跡が１棟なのか、あるいは２棟以上になるのかもまだよく分かりません。しかし、この建物跡は、これまでに恭仁宮で見つかった「内裏西地区」の中心建物SB5303（南北４間×東西５間、規模は東西15m、南北12m）や、「内裏東地区」の中心建物SB5503（南北４間×東西７間、規模は東西21m、南北12m）よりも大きく、大極殿SB5100（南北４間×東西９間、規模は東西44.7m、南北19.8m）に次ぐ大きさでした。また、今回見つかった大型建物跡は、大極殿に非常に近い場所に建てられ、「内裏東地区」がすぐ北側に迫っています。この場所には、本来は大極殿院回廊が造られていたと考えられ、「内裏東地区」にも近すぎるため、恭仁宮の大極殿院や内裏地区が完成するまでには壊されてしまい、非常に短い期間だけ建てられていた建物ではないかと考えられます。

『続日本紀（しょくにほんぎ）』には、恭仁宮の完成までの間に、仮に造られた施設について

天平13年正月　「宮垣（みやがき）未だならず、めぐらすに帷帳（とばり）をもってす」

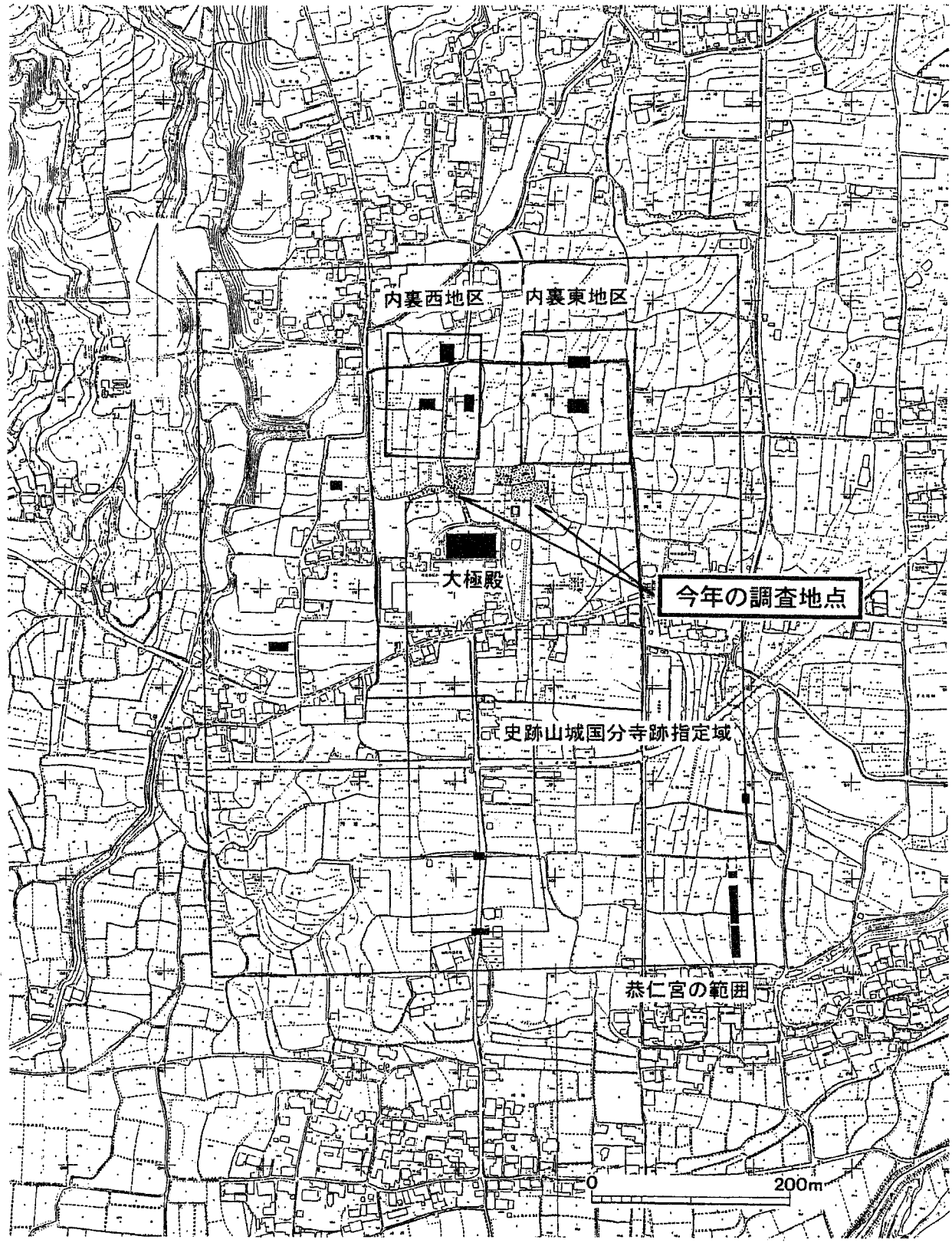
天平14年正月　「大極殿未完成のため、仮設の四阿殿（あずまやとの）において朝賀（ちょうが）を行う」

とする記事が見られます。

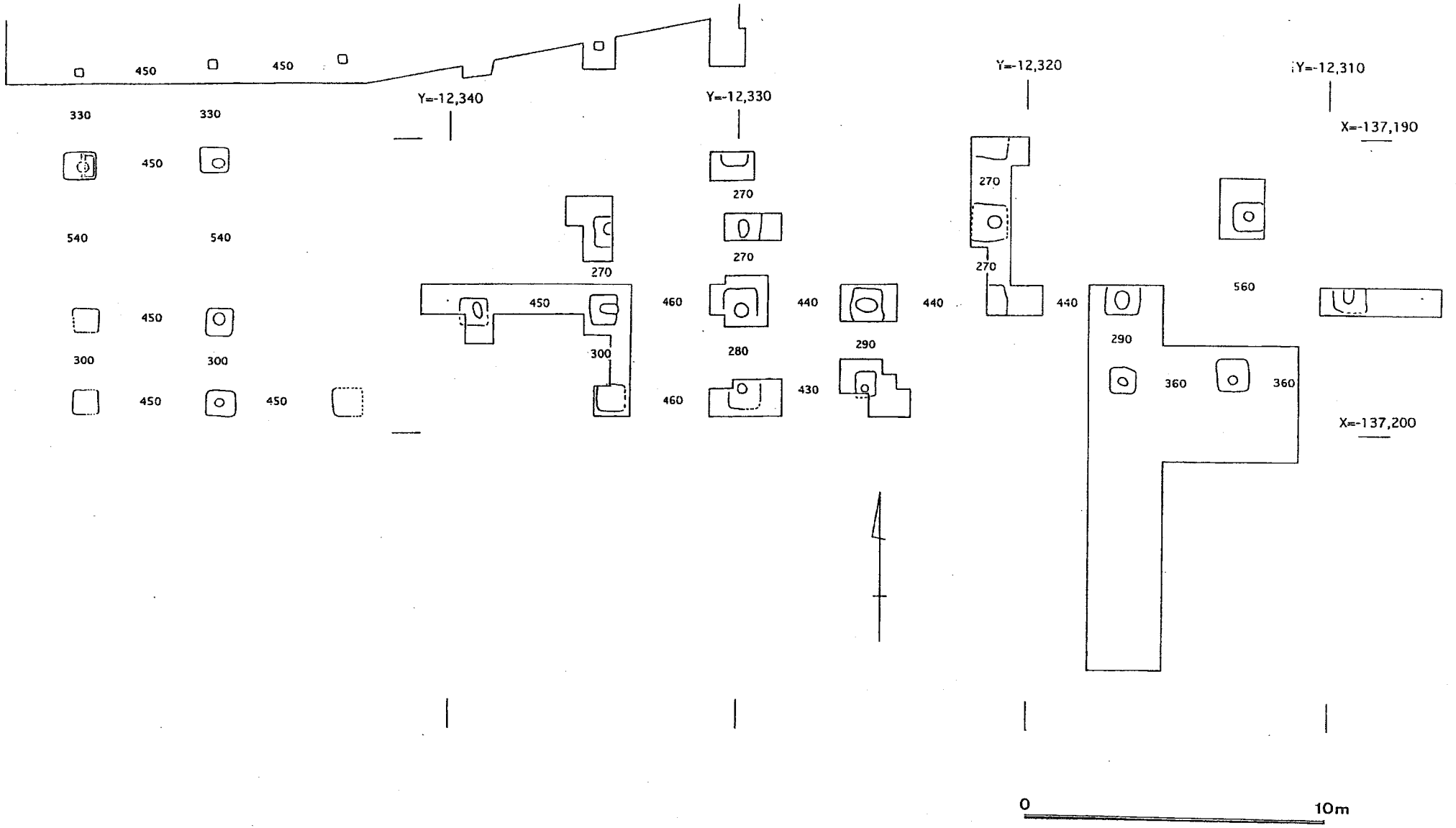
大極殿などの主要な建物が完成するまでの間、仮の建物として宮の中で重要な役目を持っていたのではないかと考えられます。

おわりに

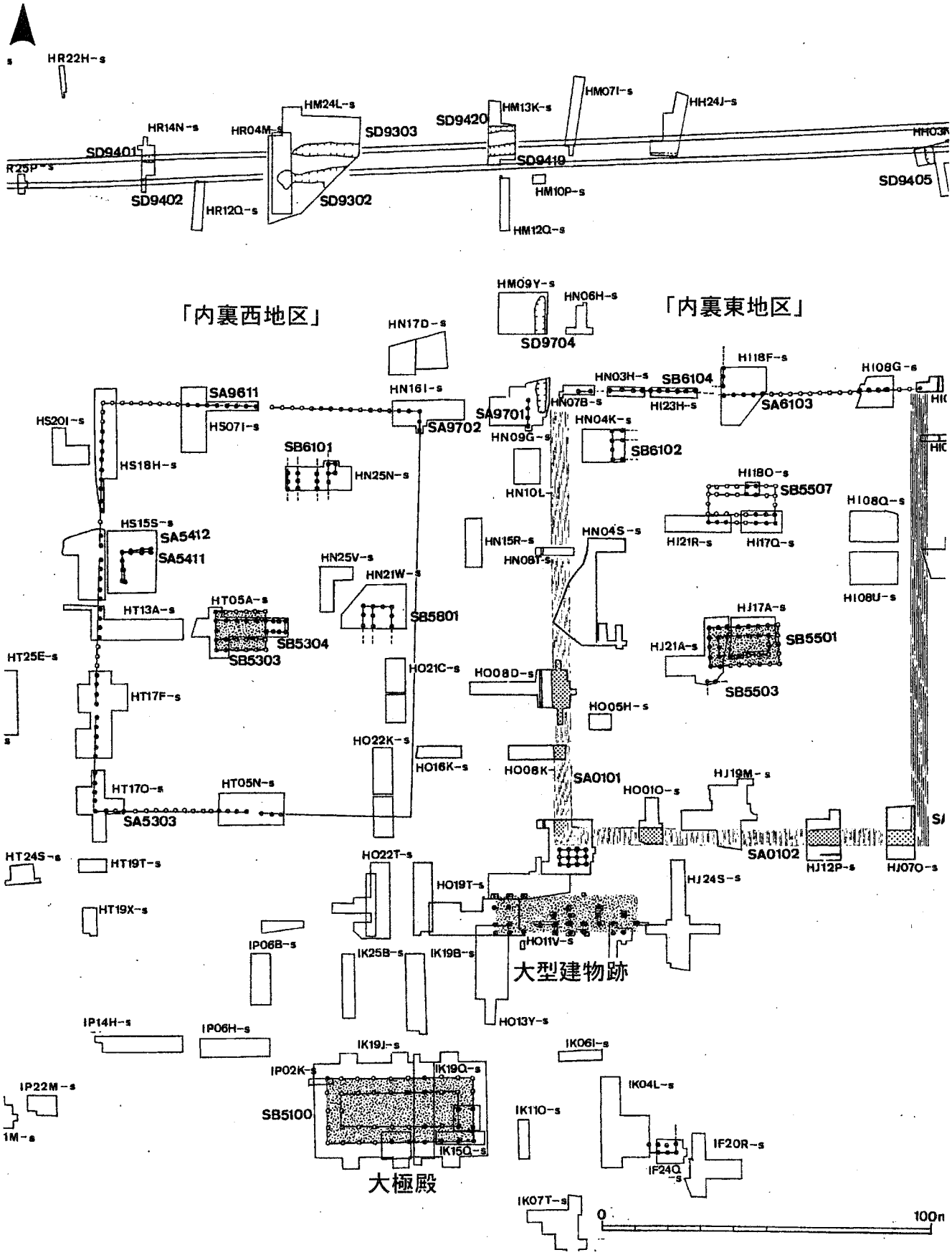
今回の調査では、大型建物跡がいったい何であったのかわかりませんでした。今後は、平城京などの他の都で、同じような建物跡が見つかっていないかを調べることや、今回見つかった大型建物跡の周りでさらに調査を行って、どのような建物跡であったかを確かめる必要があります。



第２図　恭仁宮の全体図（S=1/6,000）



第３図　大型建物跡の全体図



第４図　恭仁宮の中央で見つかっている建物跡

京埋セミナー資料№0103-315

藤原摂関家と宇治の成立

宇治市歴史資料館
主事　浜中　邦弘

はじめに－時代が移り変わる（11・12世紀）－

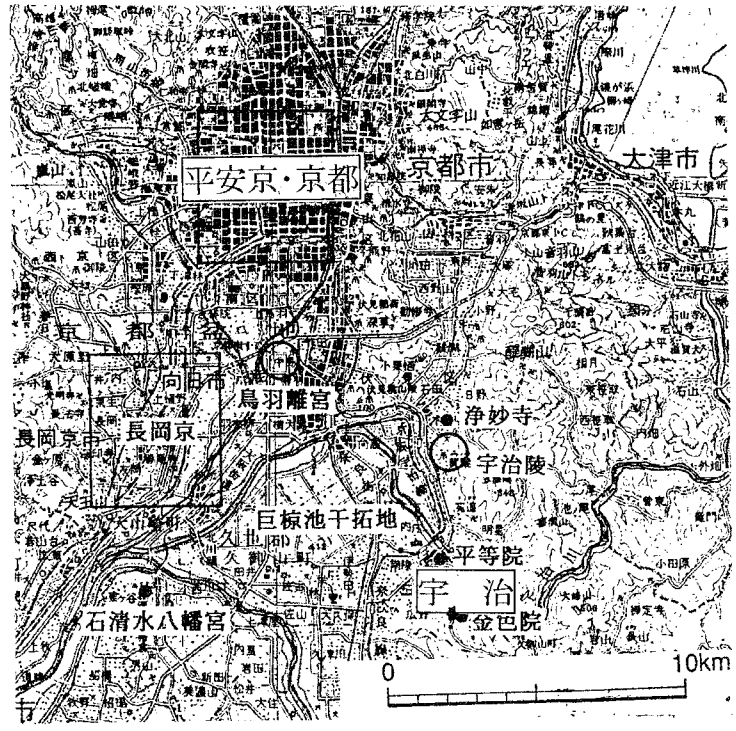
1．みやこの風景

2．平等院創立と宇治

3．宇治市街遺跡－別業地域の発掘調査－

4．宇治の都市的景観成立と藤原摂関家

おわりに－はるか遠く陸奥国でも・・・－



宇治の位置

摂関期　　**院政期**

平安時代中期　　平安時代後期

1052 平等院創立・末法初年

1068 後三条天皇即位

1074 平等院荘園不輸祖 **頼通崩御**られる

1086 白河上皇、院政を始める 鳥羽南殿が造られる

※平等院小御所この頃造営

1098 「京都」という地名が初めて見られる

1101 平等院大修理（忠実沙汰）

1129 白河法皇が没する

1155 源氏物語絵巻・鳥獣戯画

1156 保元の乱 **忠実失脚**

1159 平治の乱

1164 栢ノ杜の円堂が造られる

1167 平清盛が三十三間堂を造る

1185 平清盛、太政大臣になる

1192 法住寺殿が造られる

この頃、日宋貿易が盛んになる

壇ノ浦で平氏が敗れる

源頼朝が鎌倉に幕府をひらく

白磁四耳壷
栢ノ杜遺跡

南都系（平等院）――――河内向山系（平等院）

11・12世紀（平安後期）略年表

11・12世紀（平安後期）のみやこ

下鴨社
仁和寺
北野社
千本
四円寺
毘沙門堂大路
今朱雀
吉田山
双ケ丘
内野（大内裏）
法成寺
白河殿
白河
尊勝寺
法金剛院
二条
法勝寺
三条
三条町
四条
四条町
祇園社
右京
五条
左京
珍皇寺
法観寺
六波羅
六条
清水寺
東海道
丹波街道
七条
七条町
法住寺殿
八条
鳥辺野
九条
西寺
東寺
室町
大宮
西洞院
東洞院
山陰道
法性寺
鳥羽作り道
鴨川
鳥羽殿
大和大路
至宇治→
醍醐寺

天皇家略系図

- 後冷泉[70]
- 後三条[71]
  - 白河[72]
    - 郁芳門院
    - 堀河[73]
      - 鳥羽[74]
        - 崇徳[75]
        - 上西門院
        - 後白河[77]
        - 八条院
        - 近衛[76]
        - 高松院
  - 実仁親王
  - 輔仁親王

北家藤原氏略系図

- ⇨兼家
  - 道隆
    - 伊周
    - 隆家
    - 定子
      - ＊一条后
  - 道綱
  - 道兼
    - 兼隆
    - 尊子
      - ＊一条女御
  - 道長
    - 頼通
      - 師実
        - 師通
          - 忠実
            - 泰子＊鳥羽后
            - 忠通［⇨■五摂家］
            - 頼長
              - 師長
              - 多子＊近衛后
          - 家忠［花山院］
          - 経実［大炊御門］
          - 忠教［難波］
          - 賢子＊白河中宮，堀河母
      - 寛子
        - 後冷泉后
        - 嫄子＊後朱雀中宮
    - 頼宗
      - 能長＊能信養子◎
        - 宗俊
          - 宗忠［中御門］
        - 基頼
          - 通基［時明院］
        - 宗通
          - 伊通
          - 成通
          - 重通
      - 俊家
      - 延子＊後朱雀女御
      - 昭子＊後三条女御
    - 能信
      - ◎能長
        - 道子＊白河女御
      - 茂子＊後三条女御，白河母
    - 教通
      - 信長
      - 歓子＊後冷泉后
      - 真子＊後朱雀女御
  - 超子＊冷泉女御，三条母
  - 詮子＊円融女御，一条母
  - 綏子＊三条尚待

［御子左］
- 長家
  - 忠家
    - 俊忠
      - 俊成
        - 定家
          - 為家
            - 為氏
              - 為世［二条］
            - 為教
              - 為兼［京極］
            - 為相
              - 為秀［冷泉］
- 彰子＊一条中宮，後一条・後朱雀母
- 妍子＊三条中宮
- 威子＊後一条中宮
- 嬉子＊後朱雀妃，後冷泉母
- 盛子＊三条女御
- 寛子＊小一条院女御
- 尊子

■五摂家
⇨忠通

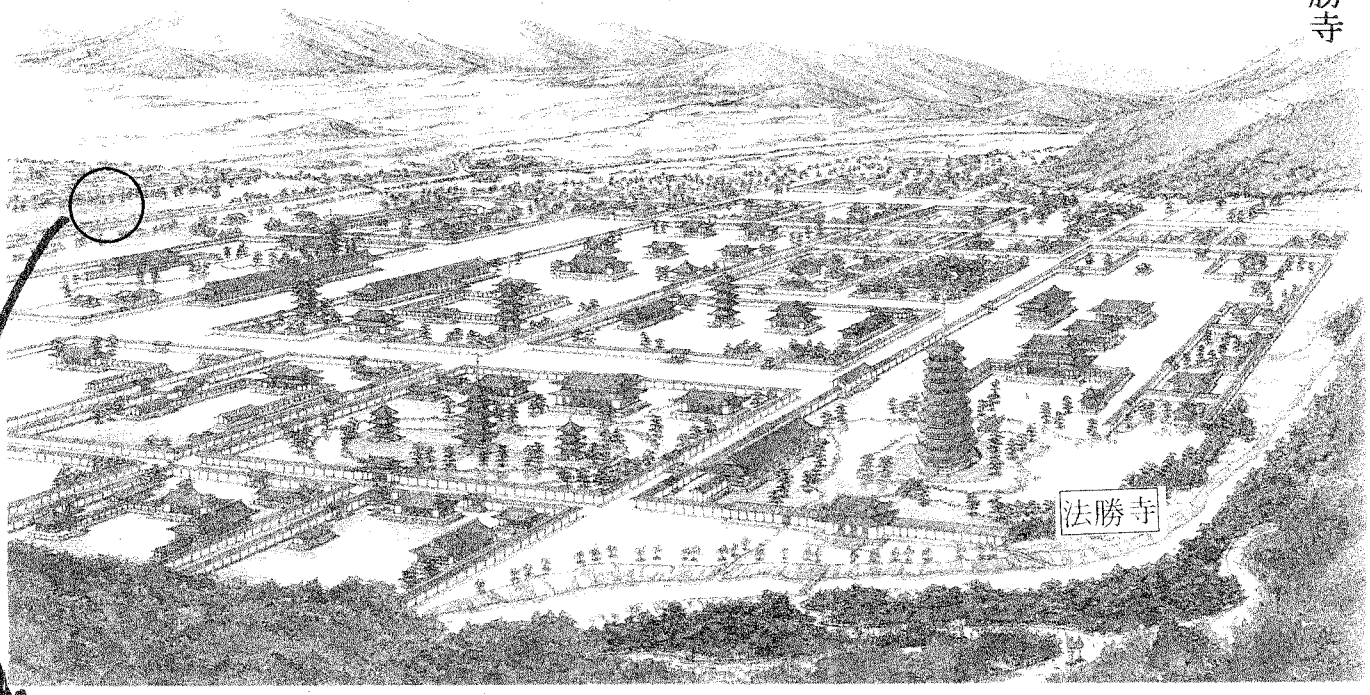
［近衛］
- 基実
  - 基通
    - 家実
      - 兼経［⇨近衛］
      - 兼平［⇨鷹司］
      - 長子＊後堀河后
    - 道経
  - 忠良
    - 家良

［松殿］
- 基房
  - 隆忠
    - 基忠
  - 師家
    - 基嗣
  - 忠房
    - 良嗣
      - 冬房
    - 兼嗣
- 信円

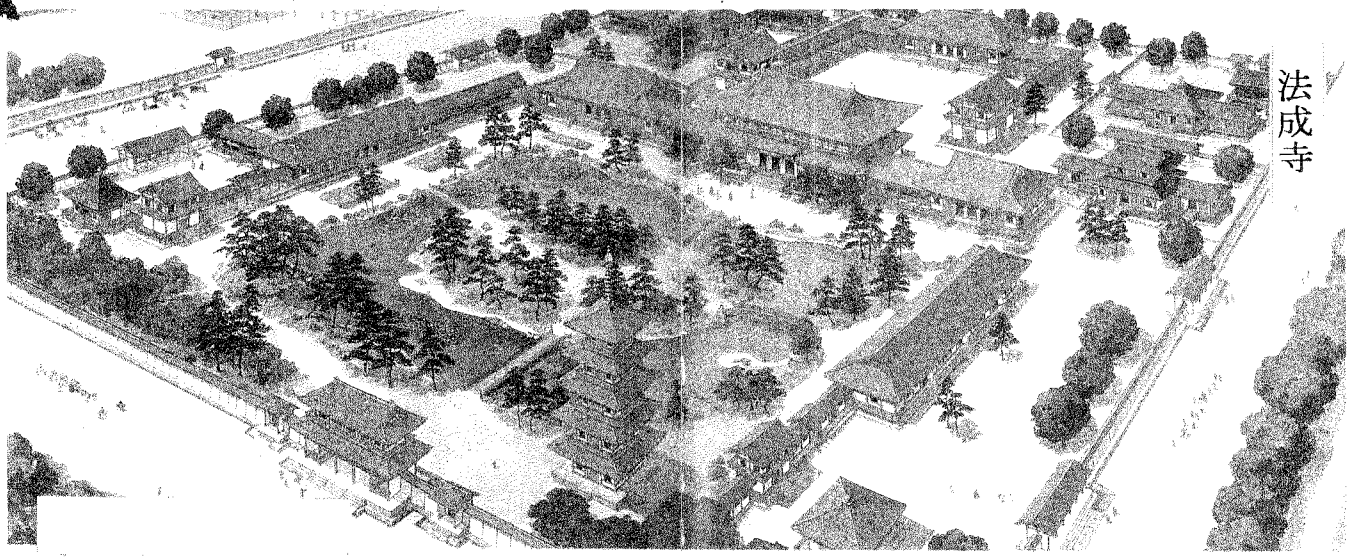
［九条］
- 兼実
  - 良通
    - 道家
      - 教実［⇨九条］
      - 良実［⇨二条］
      - 頼経＊鎌倉将軍
      - 実経［⇨一条］
      - 尊子＊後堀河后，四条母
  - 良経
    - 教家
    - 基家
    - 立子
      - ＊順徳后，仲恭母
  - 良輔
  - 良平
  - 任子
    - ＊後鳥羽后
- 兼房
- 慈円

- 聖子＊崇徳中宮
- 育子＊二条后
- 呈子＊近衛后

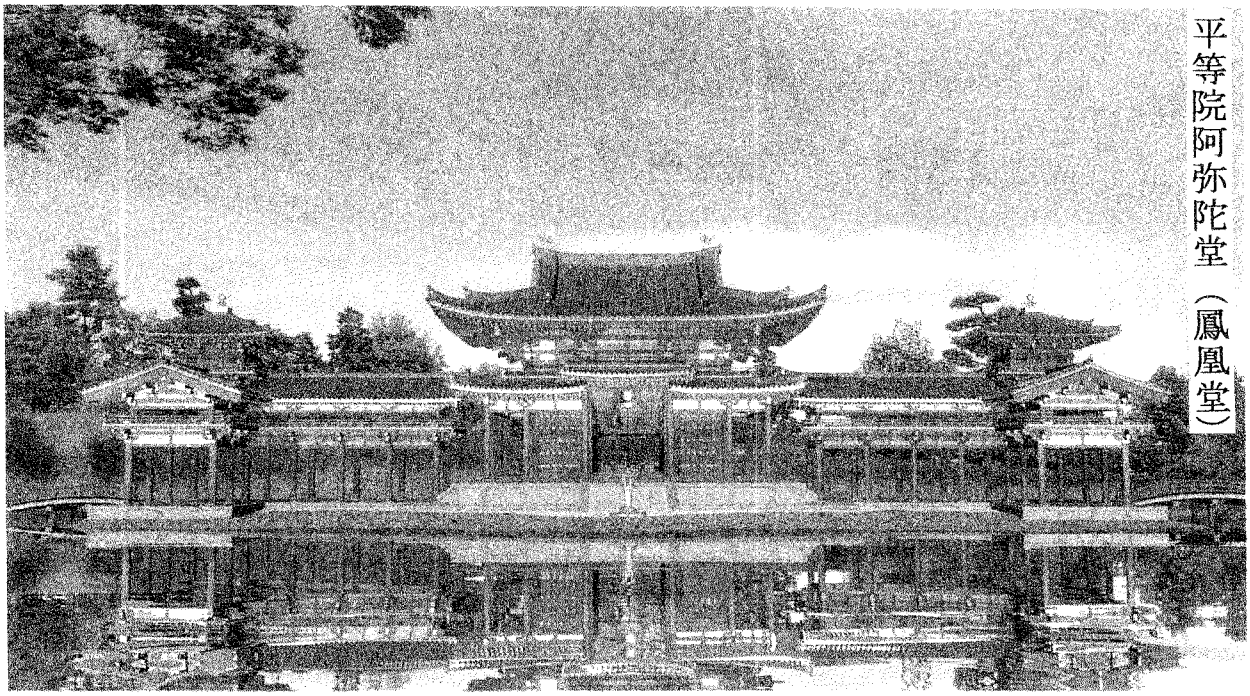
六勝寺

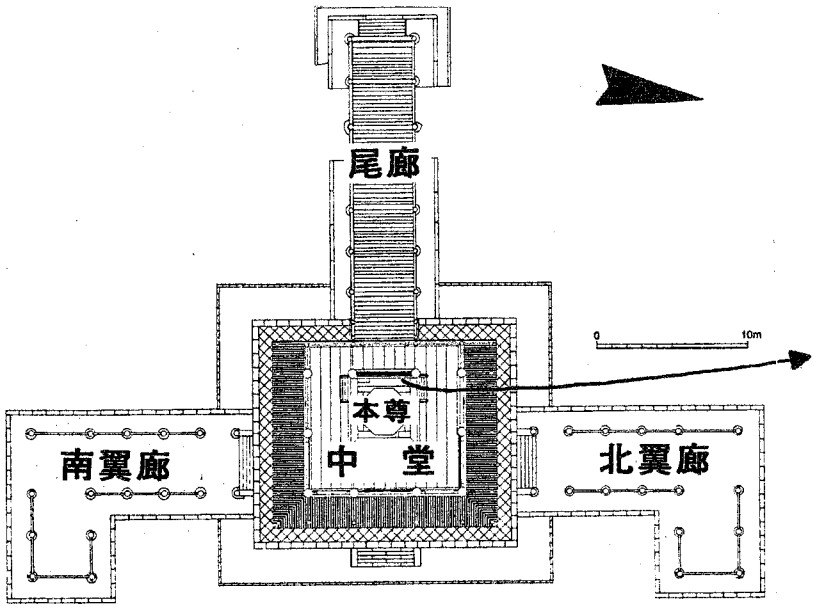


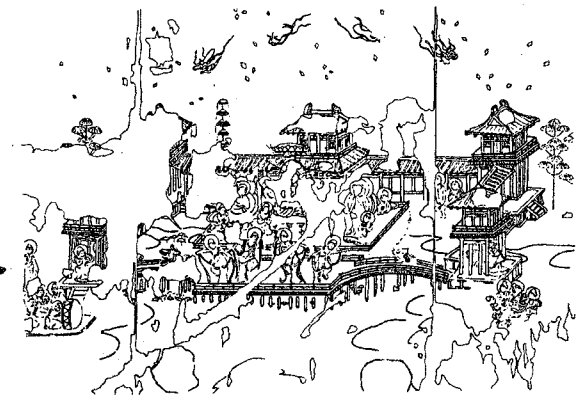
法成寺



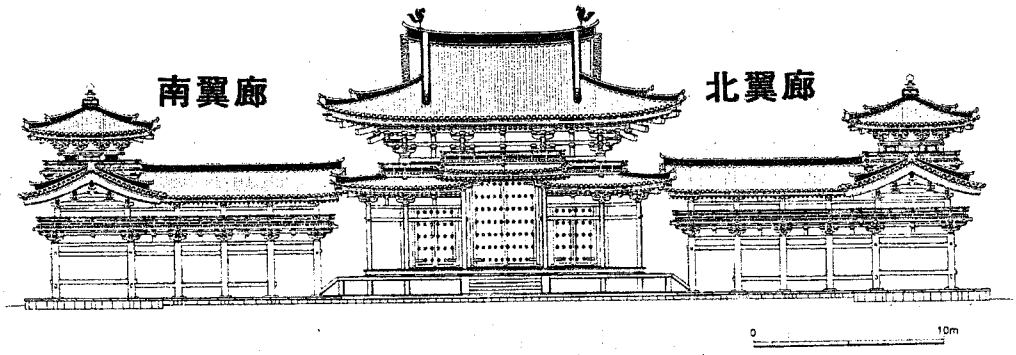
平等院阿弥陀堂（鳳凰堂）



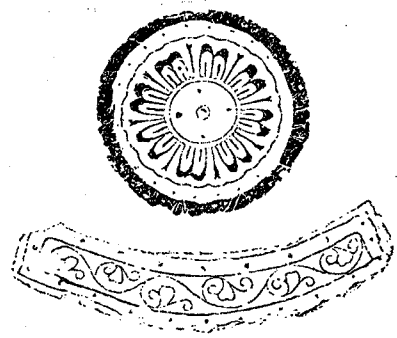




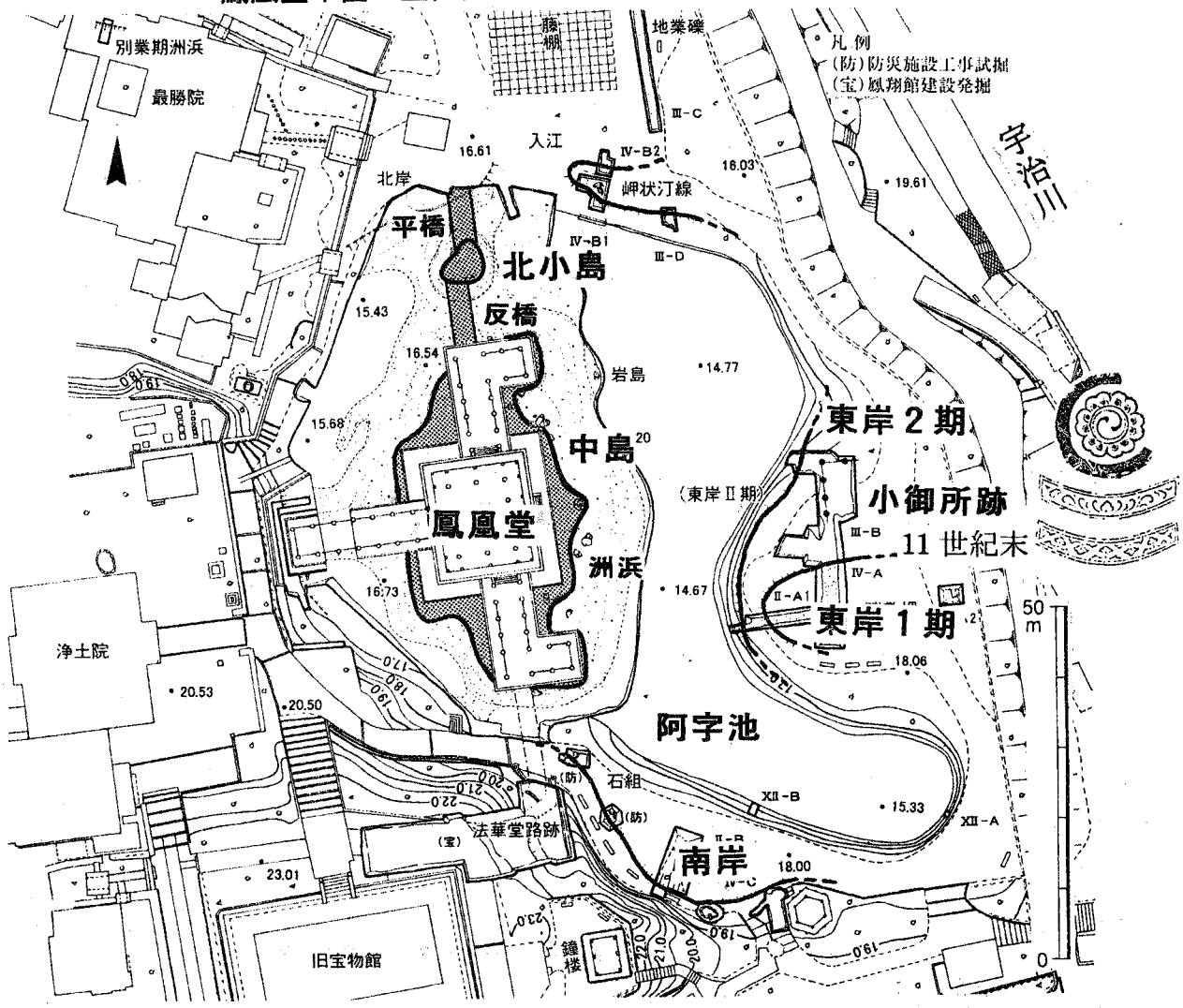
仏後壁画・阿弥陀浄土図
（部分）描き起こし図



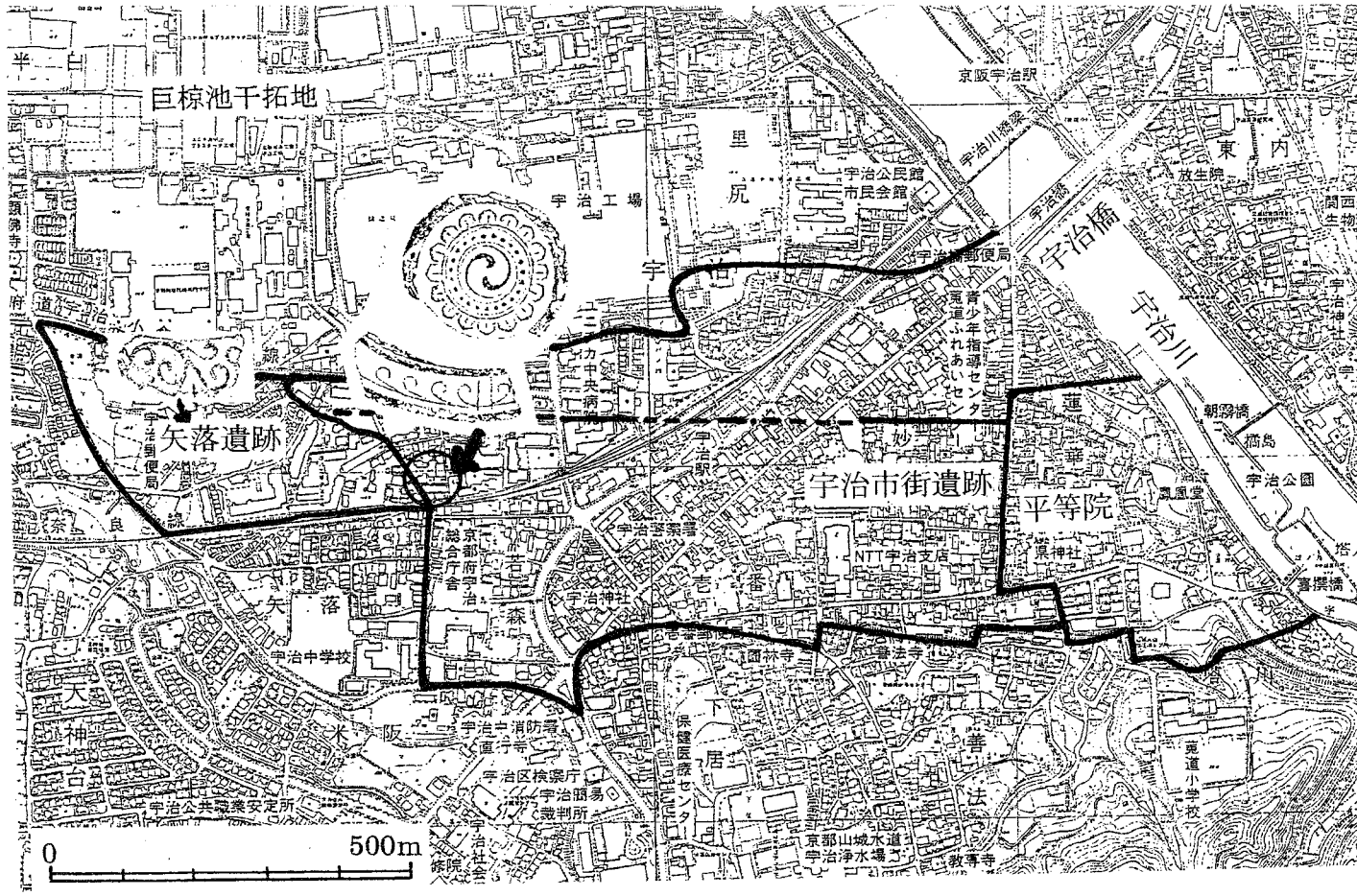
鳳凰堂平図・立面図



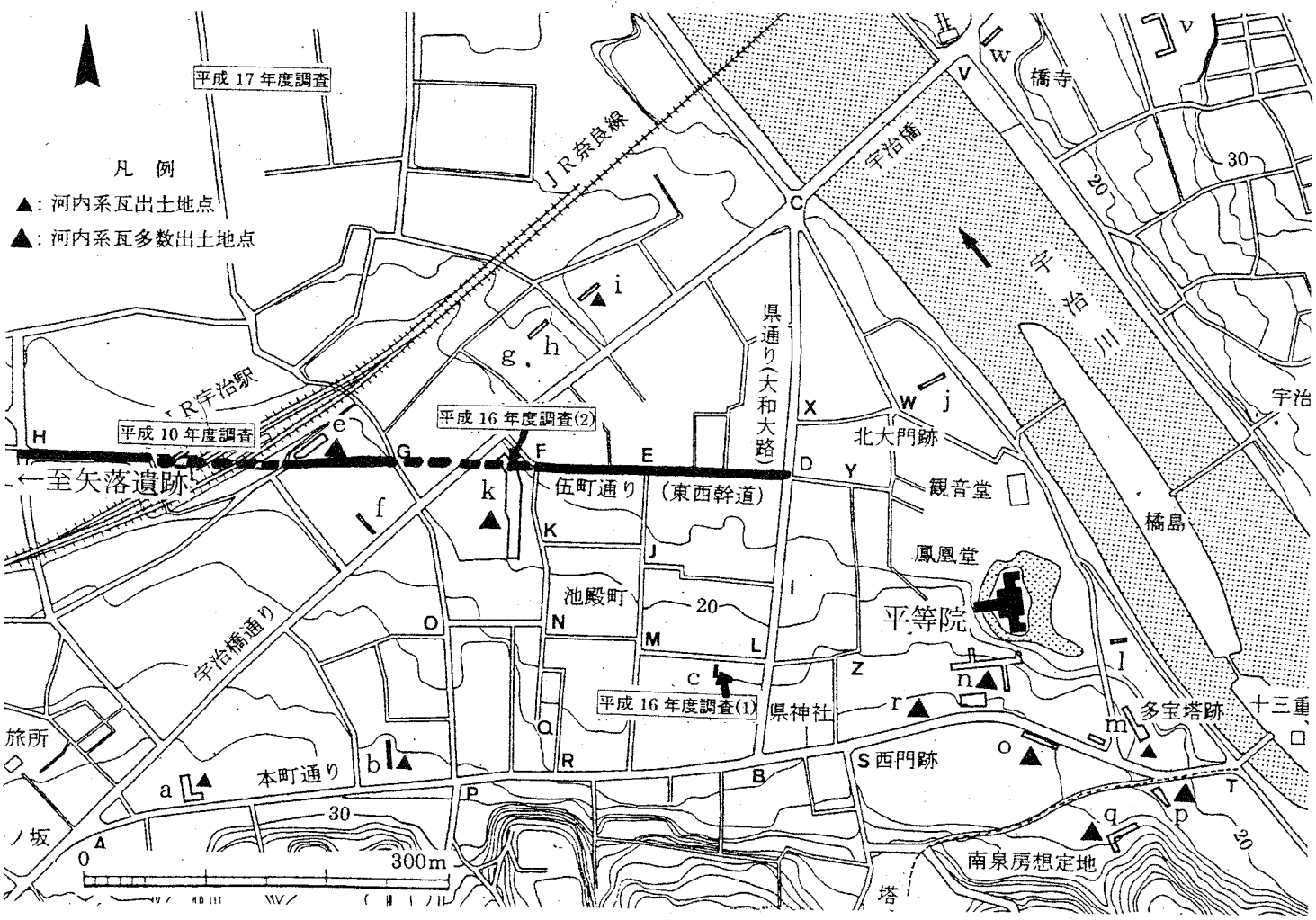
現用軒瓦（南都系・創建期）



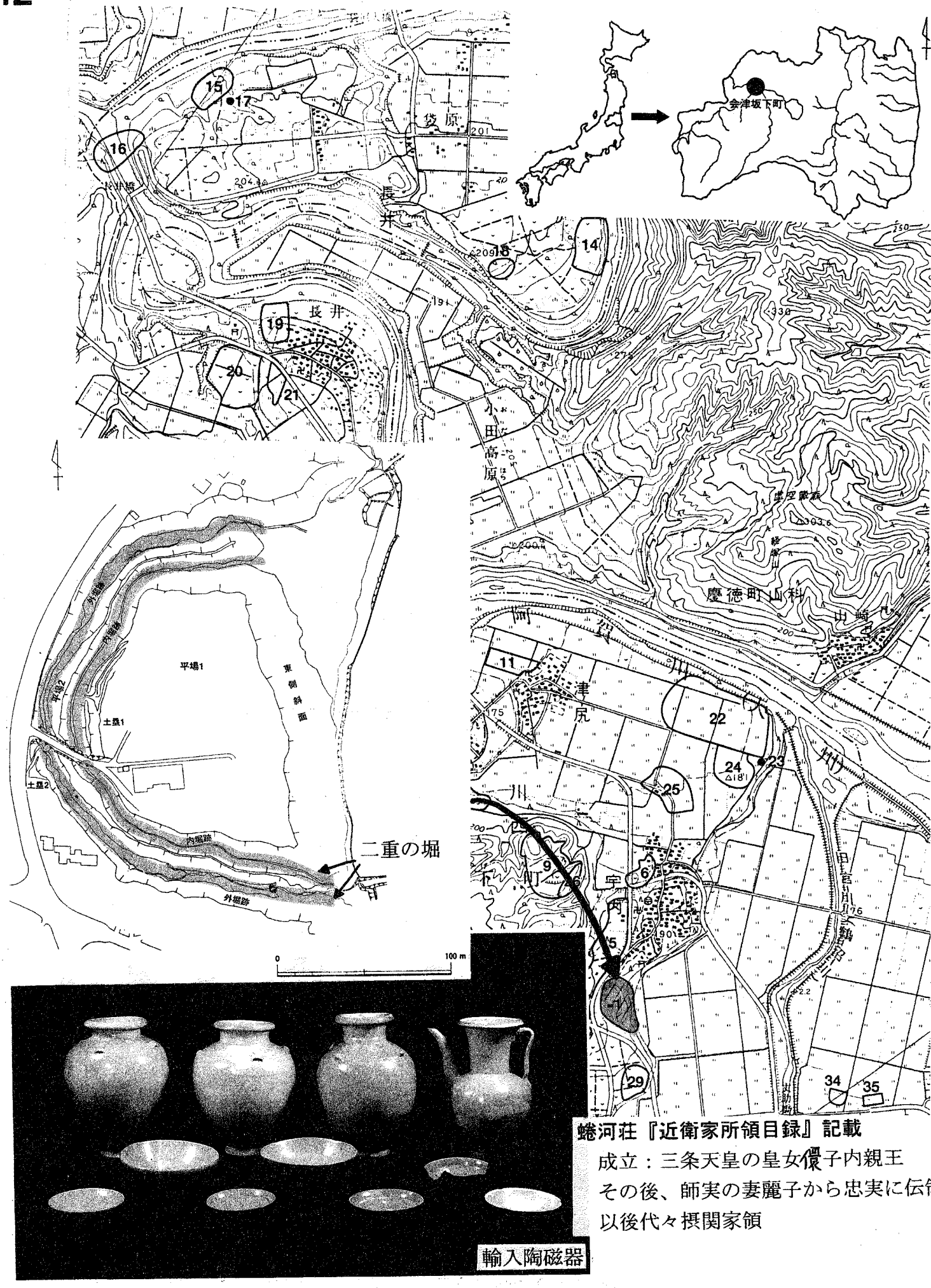
平等院発掘調査状況図（平安遺構）



宇治市街遺跡・平等院・矢落遺跡の位置関係



宇治市街遺跡発掘調査状況図



蜷河荘『近衛家所領目録』記載

成立：三条天皇の皇女儼子内親王

その後、師実の妻麗子から忠実に伝領

以後代々摂関家領

陣ヶ峯城跡（福島県会津板下町：陸奥国）

京埋セミナー資料No.0103-316

池尻遺跡と丹波国府

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
調査員　石崎　善久

1．はじめに

2．亀岡市桂川東岸の主要奈良時代遺跡

・池尻遺跡(いけじりいせき)と池尻廃寺(いけじりはいじ)

・丹波国分寺(たんばこくぶんじ)と国分尼寺(こくぶんにじ)

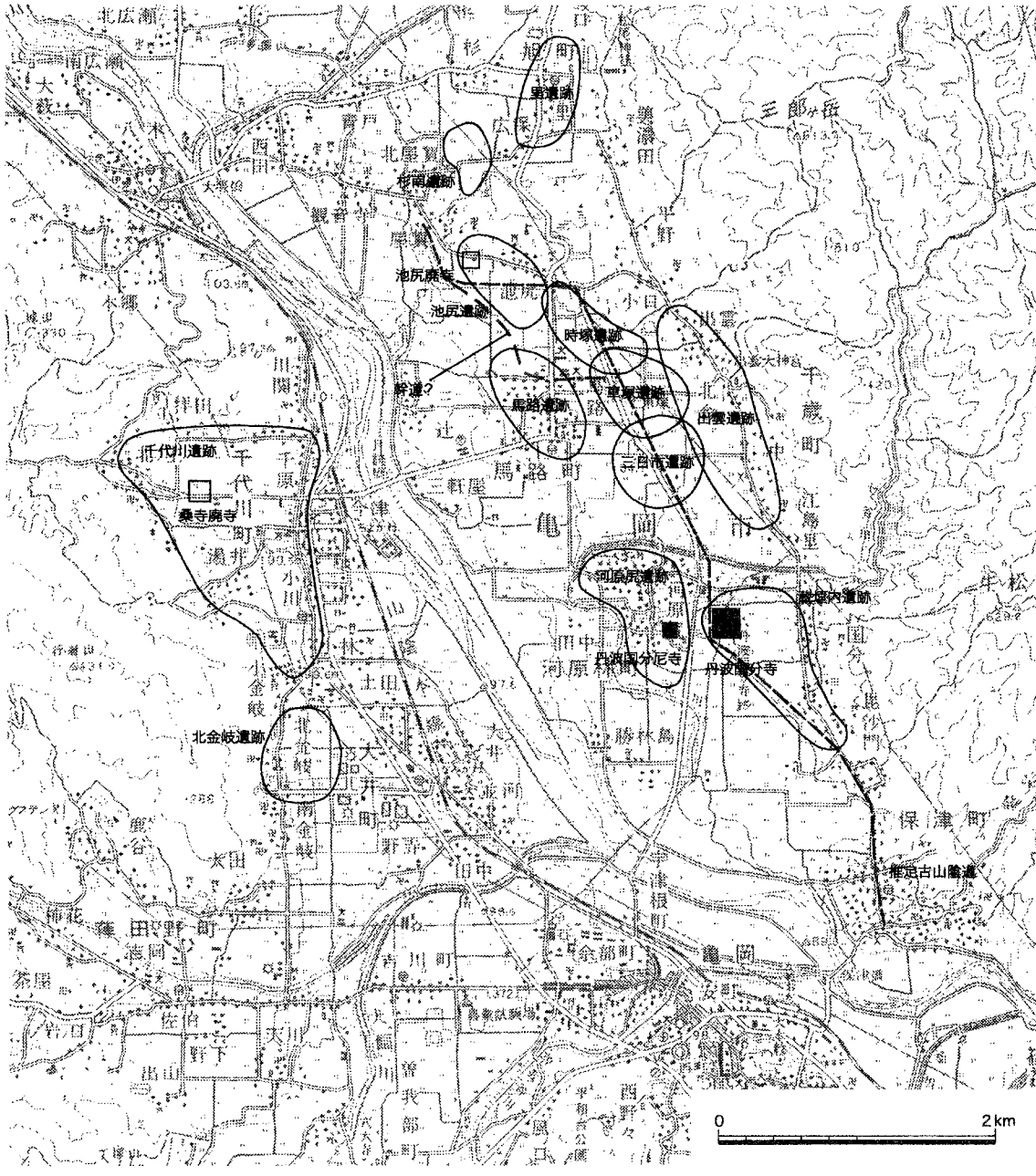
・三日市遺跡(みっかいちいせき)

・車塚遺跡(くるまづかいせき)

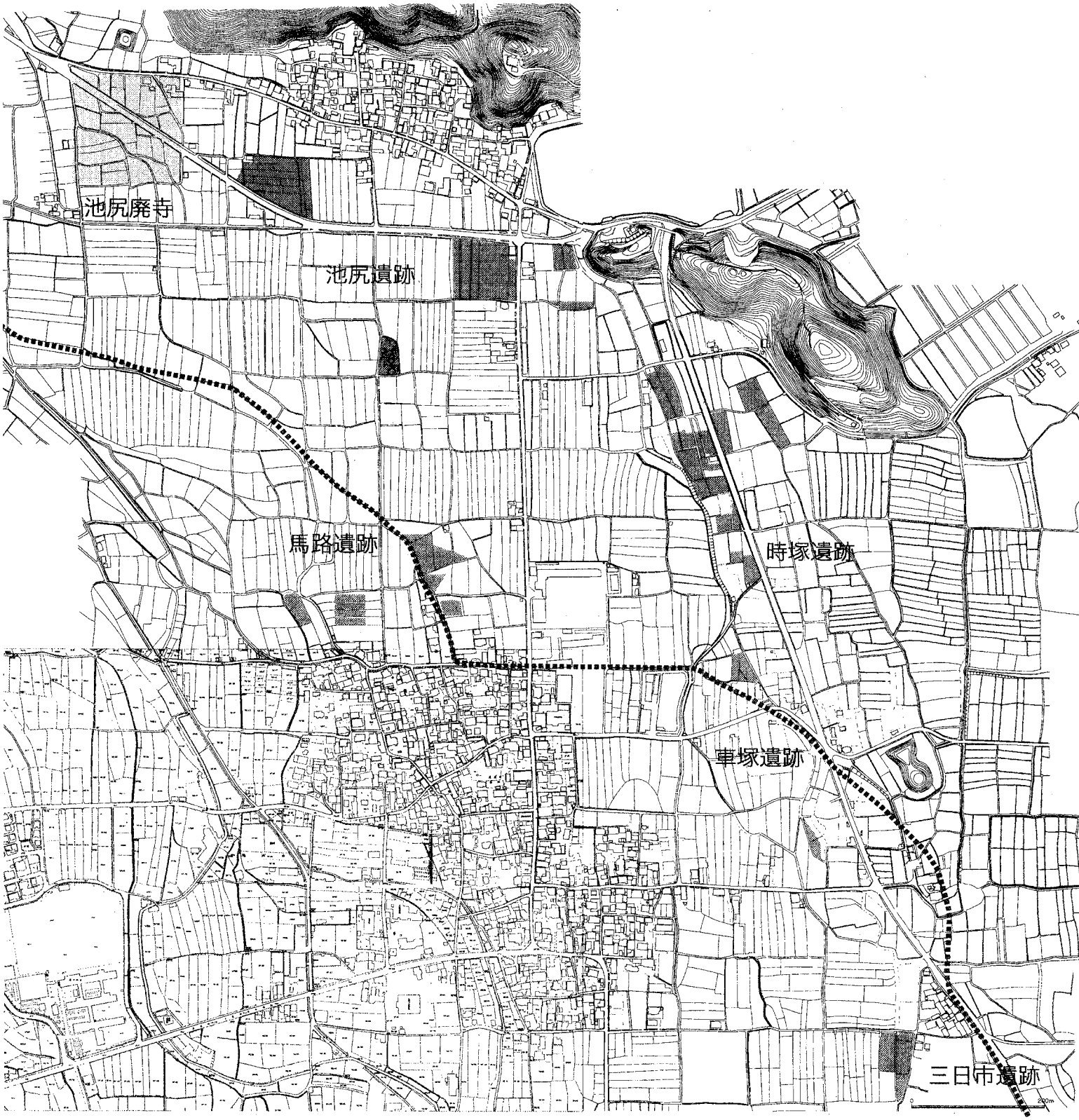
・蔵垣内遺跡(くらがいちいせき)

3．様々な丹波国府(たんばこくふ)推定地

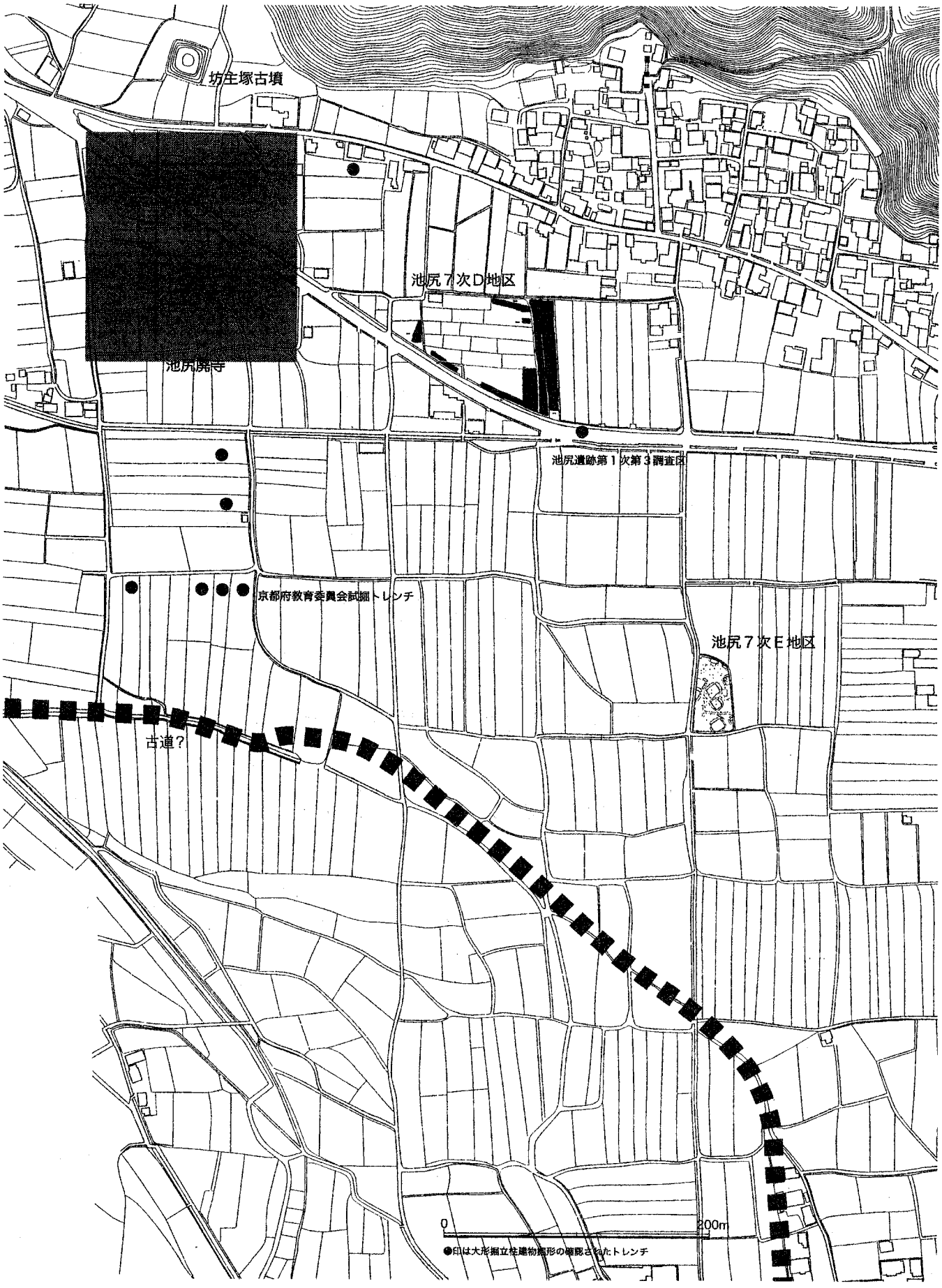
4．まとめ



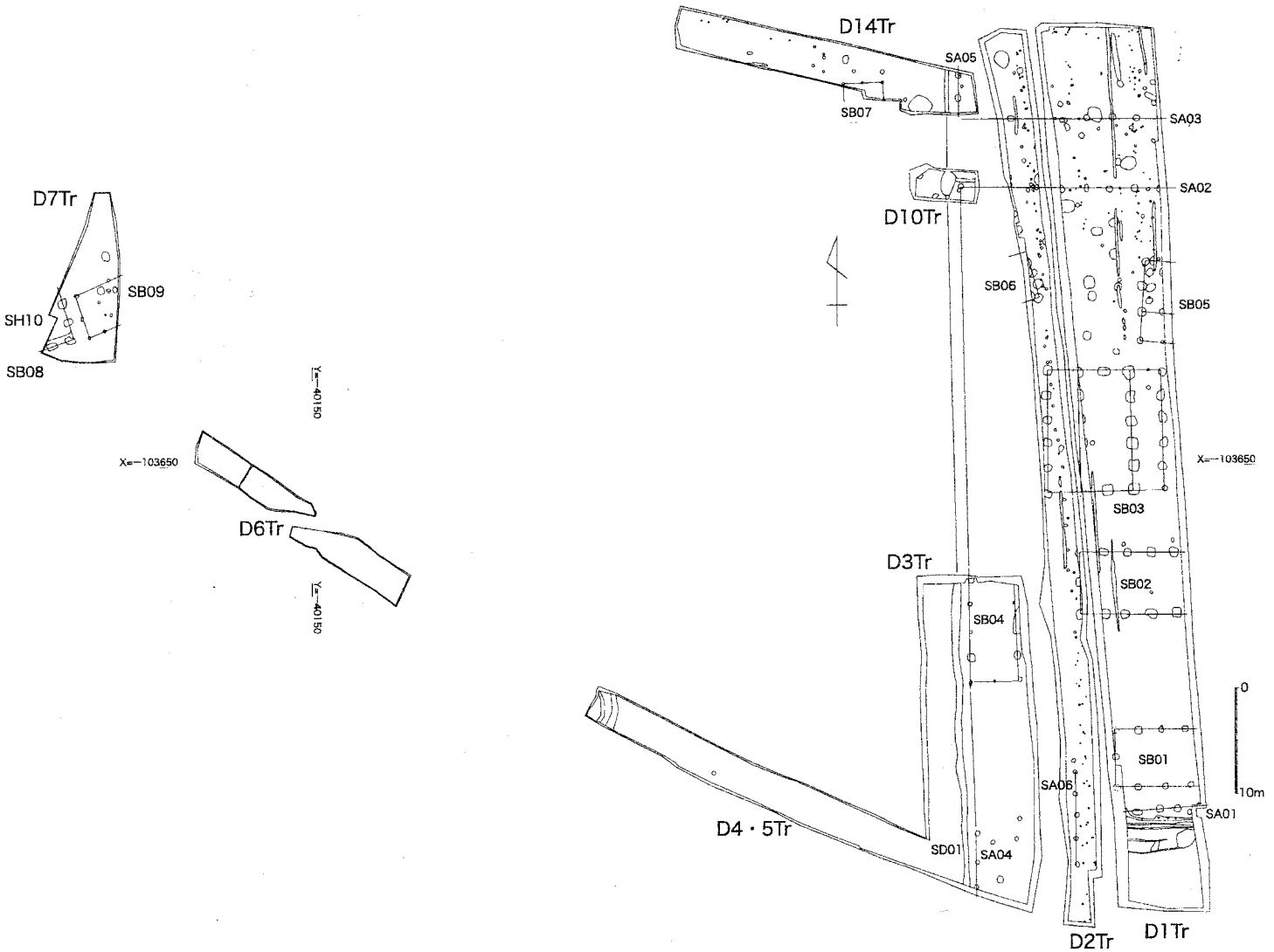
第１図　池尻遺跡周辺主要奈良時代遺跡分布図(1/50,000)



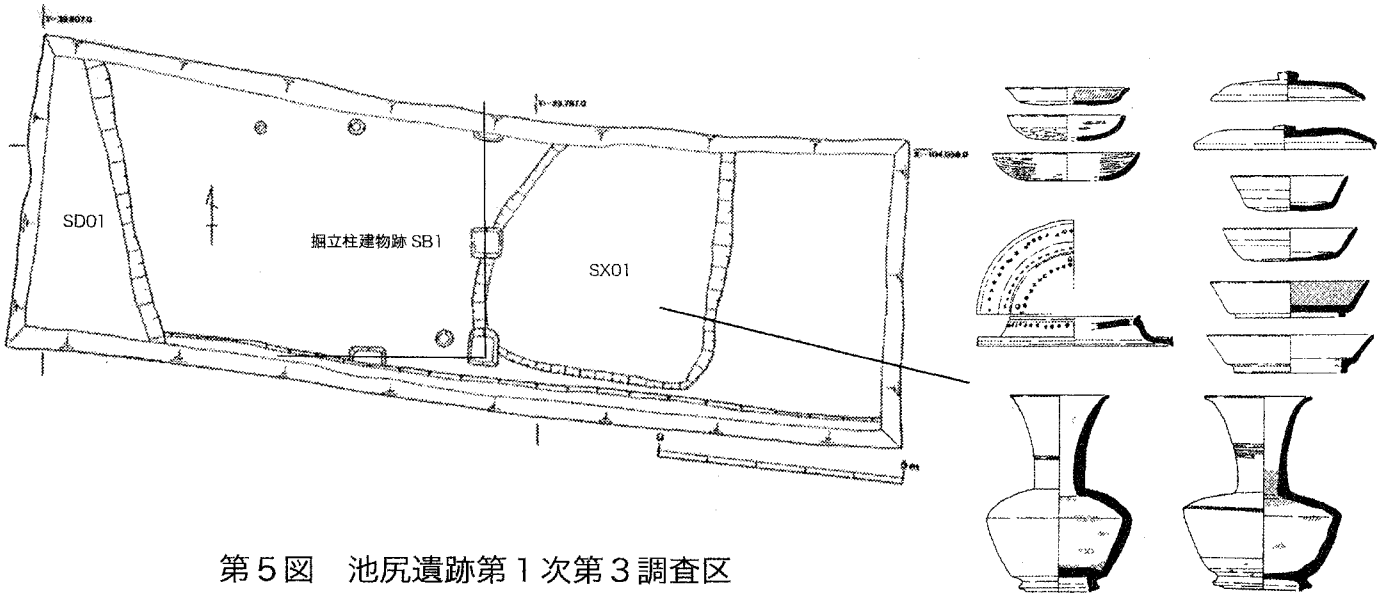
第２図　調査地周辺図



第３図　池尻遺跡第７次調査区配置図および周辺調査地位置図

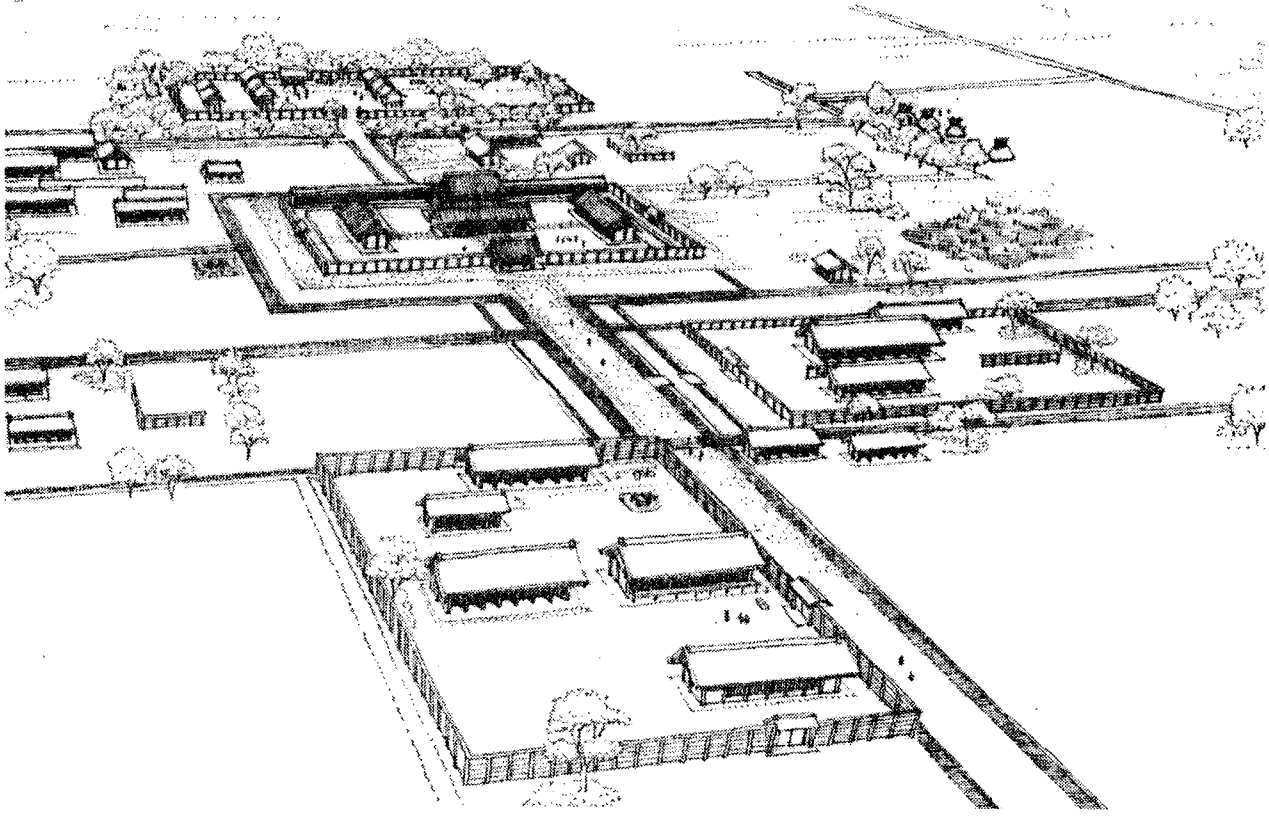


第４図　池尻遺跡第７次Ｄ地区遺構配置図



第５図　池尻遺跡第１次第３調査区
（『京都府遺跡調査概報』第 48 冊　1992 年）

SX01 出土遺物　S=1/8



第６図　下野国府の復元図
（山中敏史・佐藤興治　『古代の役所』　岩波書店　1985 年）

この事業は、平成17年度文化庁埋蔵文化財保存活用整備事業国庫補助金によるものです。